（別紙２）

# 論文審査の結果の要旨

氏名　　鄭 仁盛

本論文は、紀元前108年に設置された漢の楽浪郡郡治とされる土城址（楽浪土城、平壌市楽浪区域所在）の出土遺物と発掘記録（1935・37年　考古学研究室調査・保管）にもとづき、楽浪土器の特質、青銅器の分析による土城の性格および楽浪郡と朝鮮半島南部三韓（馬韓・弁韓・辰韓）地域との交渉を論ずるものである。

楽浪郡の考古学的研究は、これまでは古墳と副葬遺物の研究が主流で、土城址出土資料については土器以外の研究は進んでいない。また楽浪郡と交渉した三韓地域・北部九州地域では楽浪製や楽浪系とみられる土器の出土が増えているが、その認定基準は必ずしも明確ではなく、交渉史研究の隘路となっていた。

本論文の特徴は、土城址出土品の徹底した観察によって製作技法を復元し、隣接地域の同種遺物との差異を明らかにして、楽浪遺物の特質を明快に説明している点にある。

土器については詳細な観察から製作工程・技法を復元し、瓦製作技法と共通点のあることを明らかにし、復元案を陶芸家の協力による製作実験で検証する。さらに考古学研究室所蔵の中国遼寧省出土漢代土器や、楽浪土器の製作技法を受けついだ三韓地域の瓦質土器と比較して、類似性の背後にある製作工程・技法の差異を摘出し、楽浪土器の特質を浮き彫りにする。工程・技法復元の記述は詳細をきわめ、また多数の図面によって容易に理解できるよう工夫されている。

青銅器については微細な青銅塊の成因、鋳型破片の特徴、銅鏃の製作技法を分析した上で、発掘時の記録からそれらの出土位置を推定して、土城の一角には青銅器製作工房が存在しそこではガラス玉をも製作していたことを明らかにする。

最後に、漠然としていた三韓社会と楽浪郡の交渉・交易の変遷を、三韓地域出土の各種楽浪系遺物の変化から４段階にわけ、各種交易品の種類と量、交易の形態とルートの推移が三韓社会内部の動向や楽浪郡の盛衰と緊密に対応していたことを論証する。

本論文の最大の成果は楽浪土器の実態をほぼ完全に解明したことである。これによって三韓地域・北部九州出土の楽浪土器とひとくくりにされてきた土器を、平壌地域で製作された土器と少数の在地模倣土器とに区分する基準が得られ、ひいては楽浪郡所在地の平壌説・中国遼寧説に対する土器からの新たな視点を導入できることとなった。さらに政治的中心である楽浪土城が土器・瓦・青銅器などの生産地でもあったことを明らかにした点と、三韓地域と楽浪郡の交渉を段階ごとに考察した点も、楽浪郡の性格だけでなく三韓地域と日本列島の対楽浪郡交渉を研究する上で確かな基礎を提供したといえる。

このように本論文は、楽浪土器の編年が完全に詰められていない点や、三韓地域と楽浪郡との交渉形態の考察に不十分な点があるとはいえ、楽浪郡研究の新たな出発点となる。

よって審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。